4

お茶の水女子大学
# 貴重資料紹介

## 『郊遊会図巻』より
## 「恵比寿麦酒工場見学」

（明治27年6月19日制作、画:荒木寛畝、詞書き:小中村義象）

大学資料委員会委員　秋山　光文（文教育学部教授）

明治27(1894)年５月６日、東京女子師範学校の教師・学生たちは揃って目黒祐天寺まで日帰りの遠足を行った。本作品は、その模様を絵巻仕立てにしたもので、題簽欠落のため長い間の「遠足の日」と称され、記録台帳にも仮題のまま登録されていた。しかし、本委員会のメンバーでもある小風秀雅教授（日本近代史）の調査により、本学では遠足を「郊遊会」と称していたことが明らかになり、標記の題名に改められた。

冒頭には詞書きと共に、お茶の水の校舎正門から出発する摂理（校長）を先頭に、教師や学生たちの姿が描かれている。一行はその後、芝高輪から品川を経て目的地の祐天寺にいたり、目黒不動尊の旧蹟を見学した後に昼食をとる。帰路は恵比寿のビール工場見学後、愛宕山を経由してお茶の水の校舎に帰るという大層盛り沢山な内容で、こうした日程が格式高い詞書きによって綴られるとともに、伸びやかな筆致に淡彩を施した挿画が添えられて見るものの興を引く。

本図は、帰路に立ち寄った恵比寿のビール工場付近を描いた場面。目黒方面から恵比寿を目指す一行の行く手には、煉瓦造りの工場が聳えている。詞書きには、「目黒の停車場よりやや遠からざるところに煉瓦造りのいかめしきは名に高き恵比寿麦酒製造会社なり（中略）大なる機械ともにあるは 水をこし火をふきつ つきしめきあへるさま いと珍し（後略）」と記されている。文中の「恵比寿麦酒工場」というのは明治22年に建造された日本麦酒会社目黒工場を指し、煉瓦造り三階建ての工場では、ドイツ製の装置で「ゑびすビール」と名付けられた本格的なドイツ風ビールを作っていた。因みに、ビールの出荷駅として製品名から名をとった恵比寿駅が開業するのは明治34年のことで、本作品の制作時にはまだ存在していない。

挿画を担当した荒木寛畝は天保２（1831）年江戸に生まれ、８歳の時に谷文晁系の画家であった荒木寛快に入門し、やがて養子となった。養父と並んで花鳥画を得意としていたが、明治５（1872）湯島聖堂で開催された博覧会出品の油彩画に刺戟され、洋画に転向して川上冬崖に学んだ。本学には明治26年より教授として着任し、翌年に本作品を手掛けたことになる。

詞書きを記した小中村義象（ヨシタカ）は、明治中期～大正期に活躍した国文学者・歌人。号は藤園・知旦。元治元（1864）年肥後国（熊本県）生れ。国学者の小中村清矩（キヨノリ）の養子であったが、のちに本姓の池邊に復した。明治19（1886）年東京帝国大学古典講習科卒業。国文・和歌・古代法制に精通し、本学では明治31年まで国語を担当していた。